

Newsletter vol.3

2025年3月19日
特定医療法人南山会

認知症高齢者の尊厳が守られ、自分らしく暮らすことができるように 患者の行動を制限しない「身体拘束ゼロ化」への取り組み

特定医療法人南山会（所在地：山梨県南アルプス市、理事長：川崎洋介、以下「当法人」）は、日本の医療や福祉における現状と課題、また当法人の取り組みなどを紹介するニュースレターを発信しています。第3回目は、法人が運営している峡西病院（所在地：同上、院長：川崎洋介、以下「当院」）における「患者の身体拘束最小化」に向けた取り組みを紹介します。

■今や身近な病気。認知症高齢者数は443万人、2040年は584万人と推計

超高齢化社会といわれる現代の日本において、認知症は深刻な健康問題や社会問題のひとつとして注目されています。政府によると、2022年における認知症の高齢者数は443.2万人（有病率12.3%）、2040年には、584.2万人（有病率14.9%）になると推計されています。¹⁾今や認知症は誰もが関わる可能性がある身近な病気といえるでしょう。



■認知症高齢者の安全を考え身体拘束を実施する医療機関も

○認知症について

認知症は、脳の働きが徐々に低下し、記憶力や判断力などの能力が衰えていくことで、日常生活に支障が出る病気です。進行に伴ってサポートが求められる場面が増えていきますが、認知症の方を支える家族や医療従事者は、その人の尊厳を守り、希望を持って自分らしく生活できるようにサポートすることが大切です。

○高齢者の認知症と骨折のリスク

高齢になると筋力低下により転びやすくなります。それに加えて、認知症があるとさらに危険を正しく認識することが難しくなるため、転倒のリスクが高まります。若い人なら転んでも大きなケガを

することは少ないですが、高齢者は骨がもろくなっているため、骨折の可能性が高くなります。

そのため、医療機関では患者さんの安全を最優先に考え、やむを得ず「身体拘束」を行うことがあります。身体拘束とは、安全を確保するために専用のベルトなどを使って身体を固定し、行動を制限することです。例えば、点滴のチューブを自分で抜かないように、手にミトンをつけることも含まれます。身体拘束を行う際は、患者さんの安全と人権を最大限に尊重するため、法律やガイドラインに従った厳格なルールと手続きを守ることが求められます。

■1989年に認知症治療に特化した病棟を設置。身体拘束『ゼロ化』に取り組む

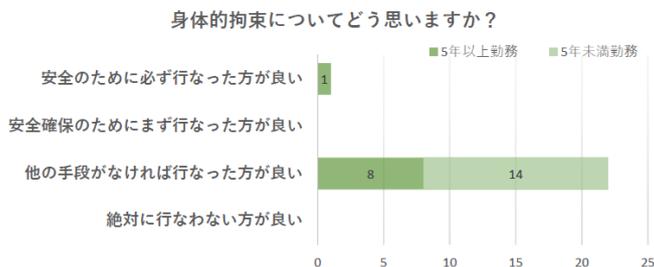
当院は県内でも先駆けて、1989年に認知症治療病棟（以下「リスタート病棟」）を設置しました。以後35年間にわたり、社会の高齢化に伴い地域で増え続ける認知症の方に入院治療を提供してまいりました。リスタート病棟では、認知症に伴う様々な精神的な症状の治療を行っています。もちろん職員としては入院している患者さんの骨折を避けたいのですが、患者さんを常に1対1で見守ることは現実的に不可能です。そのため患者さんの安全のために、拘束を行わなければならない状況もあります。しかし身体拘束は、患者さんの人権を制限する行為であり、決して望ましいケアのあり方ではありません。「患者さんの安全を第一に考えて拘束を行うのか」「患者さんの人権を尊重して拘束を行わない方が良いのか」というジレンマに常に悩まされてきました。

そこで当院の職員に「身体的拘束についてどう思うか？」というアンケートを実施しました。すると、ほとんどの職員が身体的拘束以外の手段を第一に模索したいと考えていることがわかりました。認知症の方の入院治療は、常に転倒や骨折の可能性と隣り合わせですが、転倒しないための身体的拘束は、ずっと拘束し続けなければならないおそれがあります。しかし身体的拘束をせず、転ばないように身体機能の訓練を行えば、拘束し続けることはなくなるという考えから、当院は身体拘束『ゼロ化』に取り組むこととなりました。



身体的拘束ゼロの認知症医療

認知症治療病棟スタッフ アンケート



▶ 殆どのスタッフが身体的拘束以外の手段を考えている

現在は「歩きだしたいご様子の患者さんがいれば、すぐに職員が付き添うようにする」「身体のフラつきを招かないように処方する薬の内容を慎重に検討する」「転ばないように環境面でも配慮をする」など、様々な対策を講じてきた結果、当院のリスタート病棟では1年間のほとんどの日において『身体拘束ゼロ』を実現することができています。



自院データ

リスタート病棟における身体拘束件数

現在の拘束しない認知症看護、介護を維持していくためにどのようなことを大切にしているのか、リスタート病棟で責任者をしている河西看護師に聞きました。

■拘束しないためにはスタッフ同士のコミュニケーションから

認知症の方を看護、介護する上で、困る症状のひとつに「興奮」があります。これは、認知症により自分の置かれている環境や状況を理解できず、不安に思っ落ちて着かなくなったり、イライラしたりしてしまうことが背景にあります。興奮状態になると、大声を出す、物を投げる、落ち着きなく歩き回るといった行動が見られることがあります。これらの行動は、本人が感じている不安や混乱が背景にあるため、安心してもらえるように周囲の職員が優しく対応します。しかしそれでも落ち着かない場合も少なくありませんので、職員は対応に苦慮します。対応しても落ち着かず歩き回ってしまう場合、拘束することも考えてしまいますが、河西看護師によると、まずは「対応に悩んだら、気兼ねなく職員間で相談し合うこと」が大切だと言います。1人で抱え込まずに職員内で状況を共有し合うことで、より良い対応策が見つかります。リスタート病棟では、そうした職員同士で相談し合える雰囲気作りに取り組んだおかげで、職員間でも拘束以外のアイデアが生まれやすくなってきているように感じているそうです。大切なことは「これは私自身が受けたい看護だろうか」「私の親に同じケアを提供したいと思えるだろうか」と自問し、常により良いケアの方法を模索し続けることだと言います。

■大善の功德と、小善の罪



当院では、バリュー（価値観）の「利他の心」の中で、「大善の功德と、小善の罪」という哲学を大切にしています。患者さんが転倒しないように安全のために身体的拘束を行うことは、決して悪いことではないと思います。しかし、転倒しないために身体的拘束をおこなってしまうと、おそらく身体的拘束をし続けなければなりません。そうすると、結果的に身体的拘束はその人のためにはならないことだと思います。それよりは、たとえ転倒する危険があったとしても、身体的拘束を行わずに身体機能の訓練をおこなうことの方が、真に患者さんのためになります。私たちは、身体的拘束を行うことは「小善」であり、一見すると患者さんを危険にさらしてしまう厳しいことのようにみえますが、身体的拘束を行わずに身体機能を訓練することが「大善」だと考えています。

峡西病院 院長 川崎洋介

1) 内閣府ホームページ 令和6年版 高齢社会白書 2 健康・福祉

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/pdf/1s2s_02.pdf

■峡西病院

【社名】 特定医療法人南山会 峡西病院

【設立】 1953年8月

【代表】 院長 川崎 洋介

【住所】 〒400-0405 山梨県南アルプス市下宮地 421

【事業内容】

精神科病院（外来、精神科急性期治療病棟、精神科療養病棟、認知症治療病棟）

【URL】 <https://www.nan-zan.or.jp/hp-kyosai/>

■会社概要

【社名】 特定医療法人南山会

【設立】 1957年7月2日

【代表】 理事長 川崎 洋介

【住所】 〒400-0405 山梨県南アルプス市下宮地 421

【事業内容】

精神科病院 峡西病院

障害者地域活動支援センターきがる館

訪問看護事業所アルプス訪問看護ステーション

介護老人保健施設関西老人保健センター

就労継続支援 B 型事業所アルプスファーム

【URL】 <https://www.nan-zan.or.jp/>

<お問い合わせ先>

特定医療法人南山会

TEL : 055-282-2151 (代表) 055-244-7715 (直通) FAX : 055-284-4886

担当 : 川口